▼書評

今井宏昌著『暴力の経験史
――第一次世界大戦後ドイツの義勇軍経験1918～1923』

（法律文化社、二〇一六年五月、三一一頁、六四〇〇円＋税）

藤原辰史

どの国の歴史も、暴力から自由ではない。そして、いまなお暴力から自由な国は存在しない。

家庭、学校、病院、刑務所、軍隊、国家、あらゆるものが暴力にさらされ、また、暴力の担い手になっている。歴史それ自体がいまにも暴力に溺れてしまいそうだ。これだけ時間的にも空間的にも暴力が偏在しているなかで、あえて「暴力」という文字を研究の課題として掲げることは、根気はもちろんのこと、ある程度の勇気が必要だと思う。『暴力の経験史』というとても大胆で、恐れ知らずともいうべき名前の本が、若手の研究者の第一作から生まれたことを、まずは素直に喜びたいと思う。

こうした大きく重たいテーマを、本書は、これまた暴力の問題を考えるには絶対に外すことのできないドイツという国の歴史で、しかも、第一次世界大戦後に公的なコントロールを離れて暴力が猛威を振るった一九一八年から二三年にいたる時代に、大戦従軍者で義勇軍の体験者でもある三人に焦点を当てて分析しようとする。これは一見、古典的な伝記的叙述のようにみえるが、実際は異なる、と著者はいう。「経験史」という手法を選んでいるためだ。ラインハルト・コゼレックからベンヤミン・ツィーマンにいたるまで、さまざまな先行研究を吟味しながら、著者は「経験」について、「現在という時間軸に足場を置きながら、過去の意味づけや未来への展望を繰り返す一連のプロセス」と定義している。つまり、経験とは、出来事が歴史主体に直撃し、それによって得られる知覚的な印象である体験とは異なり、解釈され説明されたものであり、それゆえに、時間的な文脈に置かれることで志向性を持ちうるものである。これまでの伝記研究が、体験と経験を分別することに比較的おおらかであったのに対し、著者は、くどいほどまでに三人の言説の点検を繰り返して、それらの言説の「利用のされ加減」や「無視のされ加減」のようなものを強調していく。よって、三人の人物とも、小説や映画の主人公になりうるほどの迫力ある人生を送っているが、著者は歴史研究者の「語り口」が人物の経験を体験と同等なものにしてしまうことを忌避しているため、比較的あっさりと叙述している。評者の読後感では、もう少し三人の叙述に肉付けをしても良かったと思ったが、印象論の枠を出るものではない。

とにかく、三人の登場人物は、暴力が野放図に吹き荒れた時代を、それぞれ、大事な場面で自己言及を怠らずに生きた人物だけに、大変魅力的である。

一人目は、アルベルト・レオ・シュラーゲター Albert Leo Schlageter（一八九四－一九二三）である。西南ドイツの農民家庭に生まれた「カトリック青年」である彼は、第一次世界大戦に従軍し、塹壕戦を戦うが、そのなかでもずっと聖職者を志すという初心を忘れなかった。初期は、塹壕のなかで戦争に恐怖とともに魅惑を感じつつ、戦うことへの宗教的な意義を感じていた一方で、生活をともにしてきた友人を戦場でつぎつぎに失い、ついに兄も戦死したことは彼に大きな転機をもたらす。自分だけが神に選ばれず、生き残りつづけたことを悩みながら、あまりにもむごい現実に次第に「神学」から離れ、一度は志した国民経済学も

捨て去る。大学から離れた彼は、「高給と入植地を約束する」バルト地域の義勇軍運動に身を投じていく。が、共和国が義勇軍の暴力のエスカレートに尻込みするなかで、共和国不信に至り、一九二〇年三月のカップ一揆に参加する。その後、ナチ党にも接近しながら、共和国に対する憎悪を募らせていく彼は、一九二三年のフランスとベルギーによるルール占領に対し、爆破テロルという直接的行動によって対抗する。ついにはフランスに逮捕され、不公平な裁判にかけられて死刑に処される。極右のみならず、共産党の政治家や、ルール占領に対し消極的態度を見せていたヒトラー一派も、反西欧、反共和国、反ヴェルサイユ体制、反ブルジョワの「英雄」として彼を神格化し、伝説化していくのである。

第二に、ユリウス・レーバー Julius Leber（一八九一‐一九四五）である。現在のフランスのアルザス、第一次世界大戦勃発時にはドイツのエルザスであった地域で、彼は経済的には恵まれていない小規模農家の家庭で生まれている。祖父のようなフランス贔屓とは距離をとりつつ、ドイツ的な教育を受けた彼は、社会民主党に入党し、第一次世界大戦に志願し、軍人として任務を果たしていく。しかし、戦後故郷を失った彼は、社会民主党右派と接近し、それが主導する義勇軍に参加。「共和国の防衛」を至上命題として、カップ一揆には反対し、徐々に義勇軍の暴力のエスカレートを批判するようになる。もちろん、ルール占領時には共和国政府の「消極的抵抗」に賛同し、シュラーゲターとは全く異なる立ち位置を選ぶ。ナチズムには一貫して批判的であり、ヒトラー政権成立後も抵抗を続け、一九四四年七月二〇日のヒトラー暗殺計画に関与、翌年に刑死を遂げている。

第三に、ヨーゼフ・ベッポ・レーマー Josef Beppo Römer（一八九二‐一九四四）である。バイエルンの愛国的で比較的裕福な家庭で育ったレーマーは、士官学校を経て将校となる。第一次世界大戦勃発とともに将校になり、東西両戦線で活躍した。しかし、負傷したあと故郷ミュンヒェンに戻り、そこで敗戦と革命に直面する。一九一九年四月にバイエルン・レーテ共和国が成立すると、オーバーラント義勇軍を組織し、レーテ共和国を打倒。興味深いのは、レーマーは、オーバーシュレージェンでのポーランドに対する軍事行動のなかで、ポーランドの敵であるコミュニズムに接近し、最終的にはナショナル・ボルシェヴィスト的な志向を持つようになることである。ルール占領期には、レーマーは、ルール赤軍出身の鉱山労働者と共闘しつつ、積極的行動をしていく。それは、コミュニストからも歓迎されていくのである。ヴァイマル末期にドイツ共産党に入党した彼は、転向を宣言し、ヒトラー政権成立後はコミュニストとして反ナチ抵抗運動を展開し、一九四四年に処刑されている。

第一次世界大戦従軍と義勇軍を経験し、最後は偶然にも刑死という人生の閉じ方をしている三人の人間のエゴ・ドキュメント、部隊史料、雑誌新聞史料の分析を通じて、著者は、第一次世界大戦からルール占領にかけてのパラミリタリの動きを整理し、政治と暴力の関係性を問うのである。

では、本書の歴史書としての価値は何か。

第一に、義勇軍経験がコミュニズム、社会民主主義、ナチズム、右翼ラディカリズムといった政治的立場のみならず、経済的目的（義勇軍に入れば給料がもらえるという指摘は大変興味深い）、自尊心、戦友に対する思いまでも抱え込むほど多彩であることを描いた点である。「反革命義勇軍」という言葉でイメージをアプリオリに制限されてきた「義勇軍」のイメージを一気に広げたことは否定できない。この「多彩さ」こそが、本書の中心的な性格である。それゆえに、レーバーにみられるよ

うに、暴力の経験が暴力批判に転じる契機を観察することにも成功している。

第二に、義勇軍経験の脱神話化に成功した点である。とくに「シュラーゲター神話」については、これまでナチスの視線から眺めることが評者は多かったが、シュラーゲター本人の揺れ動く感情を凝視することで、評者自身もシュラーゲター神話に囚われていたことを実感した。

第三に、「ドイツ史」の相対化に寄与していることである。第一次世界大戦研究はどうしても東部戦線よりも西部戦線に重点が置かれがちであるが、バルト地域からオーバーシュレージェンにかけての、のちの「ブラッドランド」での義勇軍の暴力を描いたことは、ドイツ語資料を中心に論じている限界はあるとはいえ、ドイツ史というナショナル・ヒストリーに風穴をあけるものと言えるだろう。ないものねだりだが、今後はポーランドの視点からも義勇軍をとらえつつ、複層的な義勇軍像の構築に努めてほしいと願う。

第四に、「ナチス中心史観」の相対化に寄与していることである。これまで、義勇軍は、「ナチズムの前衛」としてとらえられてきたし、また、共産主義の「敵」としてみられがちであったが、著者はレーバーとレーマーという思想的に複雑な動きをみせている人物を取り上げることで、義勇軍からナチズムへという単線的な歴史観から読者を解放してくれる。

第五に、歴史作品としてみたときに、三人それぞれの人生が、「ルール占領」へと結束していく流れは読み応えがある、ということ。三人の人生がそれぞれ独立して書かれていたら、やはり本書の魅力は半減していたであろう。ただ、レーバーとレーマーのナチスに対する「抵抗運動」と「刑死」に至る経過は、言及はあるもののあっさりとしすぎていて、欲をいえば、もう少し義勇軍経験との関連での分析を丹念に進めて欲しかった。別稿を待ちたいと思う。

つぎに、本書に対する疑問点について記しておきたい。

第一に、義勇軍といえば、教科書的には、エルンスト・フォン・ザーロモンとエルンスト・レームが思い起こされるが本書では部分的な言及にとどまっている。著者が両者とも詳しく調査していることは明白であり、そのうえで二人を論考の外に置いた理由をもう少し聞きたいと思った。前者は激烈な暴力経験を経て、戦後、広島の原爆という遠隔的かつ極端な暴力について論考を残しており、後者はいうまでもなくナチスの暴力組織である突撃隊を育て上げ、その左派的志向から結局ヒトラー＝ヒムラー一派に粛清される。もちろん、両者とも先行研究が多く、論じ尽くされていることもあるが、ザーロモンとレームがこの三人の義勇軍経験の三角形のなかにどう位置付けられるのかは、読者として気になるところであった。

第二に、本書のポジティヴな性質である「多彩な義勇軍」像とコインの裏表関係にあるのだが、「三人に共通するもの」の分析がもう少しあっても良かったのではないか。たとえば、口先だけの理論家への強烈な拒絶感や、しみついて離れない軍人的な思考形式と行動様式、対峙すべき相手が巨大な常備の暴力を不正義のために利用するのであれば非正規の暴力は正当化されるという考えは、三人の重要な時期には少なくとも当てはまる考えである。とくに、三人それぞれの「暴力」観がどのようなものかがもっと明らかになれば、つまり、ゲルニカの空襲や原爆や枯葉剤のような遠隔操作的暴力と、秘密警察のような隠されることが前提の暴力と、義勇軍のような直接的な暴力は質的に異なるのかどうか明らかにしていくことで、この問いの答えに近づくこともできよう。本書

は、この「義勇軍的なるもの」が、ナチズム、社会民主主義、そして共産主義のどれにも接続可能であり、実際に接続したことをあざやかに示したのであるが、「義勇軍的なるもの」の内実をより深く理論的に突き詰めることで、このあざやかさはもっと増したのではないか。そして、このときに重要なのは、言説の分析だけでなく、「行為」の分析である。とりあげた義勇軍の人物たちが、どれも文章を残しているが、圧倒的な義勇軍参加者はそうではなかった。いうまでもなく、歴史学の方法の根本からの検討に関わるところで、難しい課題であることは重々承知しているが、思想性と身体性が分かち難く結びつき、また、その齟齬を見ることが重要な現象であるだけに、やや言説分析に偏り過ぎている点は否定できないと思う。

さて、いうまでもなく、イギリスのEU離脱投票期の反対派の暗殺にせよ、パナマペーパーを暴いた記者の爆殺にせよ、日本のヘイトスピーチにせよ、言論が暴力によっていともあっけなく封殺されうる時代に突入したことが本書の背景にあることを、「まえがき」の行間から感じない読者はいないだろう。そして、苦楽をともにした友人が目の前で敵兵にいとも簡単に殺されるという経験を抱えてきた登場人物の生き様が決して遠い国の昔話ではないことも、同様に著者は意識して書いている。そのうえ、歴史研究者も含め、言葉の表現に短い人生を捧げようとしている人間は、身体的に避けることのできない「出来事」と遭遇することによってその言葉が試されることを、本書は残酷なほどに明らかにしている。東日本大震災のあとほとんどすべてのコマーシャルやテレビ番組が消えたように、ほとんどすべての言葉が出来事に対峙できず、崩れ落ちたことは忘れてはならないだろう。わたしたちの言葉もつねにそういった試練にさらされてきたし、いまもさらされている。本書を読むことは我が身をえぐられるようでつらいのだが、現在的な意味を感じるためだけでも読んで損はない本だと思う。

（ふじはら　たつし・京都大学人文科学研究所准教授）